

# 地方における高学歴女性のライフコース選択

## — 県立和歌山高等女学校の事例から —

土田 陽子

### 1. はじめに

本稿の目的は、中等教育以上の学歴をもつ地方出身女性のライフコース選択の特徴について、昭和戦前・戦中・敗戦期に県立和歌山高等女学校（通称：和高女 以下、和高女を用いる）を卒業した女性たちの事例から、時代背景と卒業後の進路選択の違いに注目して素描することを目的としている。

まず、先行研究の知見を整理しながら本稿の課題について述べよう。本稿が取り上げるのは高等女学校卒業生である。高等女学校とは明治32年に制度化された女子中等教育機関であり、「良妻賢母」の育成を国家公認の教育目標に掲げていた。おそらく学校差や地域差はあったであろうが、高等女学校卒業生といえば、結婚後は、「夫は外で仕事、妻は家庭内で家事・育児に専念する」という近代的な性別役割分業にもとづく家庭運営を率先して実践した女性たちであったことがこれまで指摘されている（落合1989、小山1991、吉田1991）。

こうした先行研究の知見を土台とし、和歌山市の高等女学校に注目することで地域の女子中等教育の実態と表象を明らかにしようとしたのが、土田による一連の和高女研究である（2004、2010、2011、2012、2014）。和高女卒業生のライフコースに関して、土田が明らかにしたのは次の点である。それは、大阪朝日新聞和歌山版が描き出した和高女卒業生のライフコースとは、「女学校卒業後に専業主婦となって家事と育児に専念し、子育て終了後は社会奉仕活動を行う」というものだったこと（土田2004）。そして和高女の同窓会誌で描かれていた卒業生像もまた専業主婦を基本形としており、誌上に取り上げられる数少ない職業婦人は明らかに教師に偏っていたことである（土田2012、2014）。

ここで注意が必要なのは、これらの研究が、新聞社側や学校側が編集した史料を用いた分析であることである。なぜなら、新聞社側は読者の注目に値する和高校卒業生を記事に取り上げたであろうし、学校側は和高校女生にふさわしいライフコースを歩んでいる卒業生に寄稿を依頼したであろうことが推測できるからである。もちろん、卒業生のなかにこうしたライフコースを歩んだものがいたことは間違いのない事実であろうが、そうした人々がいったい卒業生中どのくらいの比率を占めていたのかについては分析が行われていない。

このことは、本稿の分析対象時期における高等女学校卒業生を対象にした先行研究においても同様である(山本・福田1985、稲垣2004)。これらの研究では、主に高等女学校在学中の教育実態や女学生たちのありように焦点が当てられており、卒業後のライフコース選択についてはほとんど分析が行われていない<sup>1</sup>。つまり、現状としては「高等女学校卒業生たちの多くは、専業主婦として生活をしたであろう」という推測にもとづく共通認識の域にとどまっているのである。

しかし、一口に高等女学校卒業生といっても、その後さらに進学をしたものとしなかったものに分かれる。また昭和戦前期から敗戦期卒業生といえは、戦争被害から戦後復興を経て高度経済成長期を経験した、激動の時代を生きた人々である。彼女たちの卒業時期によって学校卒業後の生活に違いがみられたことが予想できる。したがって、高等女学校教育が果たした社会的役割や意味の解明をさらに進展させるには、時代背景や卒業後の進路によって、高等女学校卒業生たちが、具体的にどのようなライフコースを選択したのか分析する必要がある。本稿が取り組むのはこの点である。

では、和高校に注目する意味はどこにあるのか。女性のライフコース選択について、ある特定の学校卒業生を対象とした事例研究には津田塾大学(青井1988)やお茶の水女子大学・奈良女子大学(お茶の水女子大学企画広報室・奈良女子大学総務課大学改革推進室2001)、日本女子大学(日本女子大学女子教育研究所編1975)のものがあるくらいである<sup>2</sup>。ところが、これらはすべて女子高等教育機関であり、当時の女性のライフコース選択からすると、ほんの一握りの人々を対象とした研究といえる。

先行研究のこうした特徴に対し、和高女に注目する理由は次の点にある。それは和高女が、各府県に必ず1校は存在していたであろう、地方都市の公立名門高等女学校の一つだったところにある。和高女は東京や京都の名門高等女学校のように、設立時期が際立って早かったわけではなく、また、上級学校への進学実績が特段高いわけでもなかった。また特定の学科目に特別に力を注ぐようなカリキュラム編成でもなかった(土田2012、2014)。つまり、地域にミッション・スクールが存在しなかったという点以外は、これといった特徴のない学校だったといえる。したがって、この和高女を分析対象とすることで、「地方の公立名門高等女学校卒業生のライフコースパターン」について、ある種の典型例の抽出を試みることができると考えられるのである。

## 2. 事例対象校のプロフィールと使用データ・分析方法

本稿が事例対象とする和高女は、明治24年に設立された和歌山県内で最も歴史の古い高等女学校である。分析対象者が通学していた昭和初期～終戦期の和歌山市内には和高女以外の高等女学校として、大正元年に実科高等女学校として設立され昭和3年に高等女学校に組織変更された和歌山市立高等女学校と、大正12年に設立された仏教系私立高等女学校が存在していた<sup>2</sup>。これら3校のうち和高女には、「歴史の古さ」「入学難易度の高さ」「県内唯一の5年制高等女学校」といった理由から県内一の名門高等女学校として社会的に高い威信が付与されていた(土田2004)。

使用データは3段階を経て収集した。第一段階は、2004年4月に和高女と同窓会組織である「桜映会」の100周年記念総会出席者730名に返送用封筒を同封して調査票を配布した。その後追加調査として、同年の5月～7月にかけて昭和17年卒業生のクラス会で59名、桜映会幹部役員会で16名に配布した。そして第三段階として、同年7月～8月にかけて、名簿を入手できた昭和14年、昭和21年、昭和23年卒業生を対象に無作為抽出で各100部ずつ調査票を郵送した。配布合計は1105部であり、そのうち返送のあった415名分(回収率37.6%)のなかから、昭和4年～昭和22年卒業生にあたる304名分の回答を分析に用いることにした<sup>4</sup>。昭和23年卒業生のデータを除いたのは、戦後の学制改革による新制高校への編入学者が含まれているためである。

以上のデータを用いて、本稿では、「卒業後の進路選択」「進路選択理由」「結婚前の職業経験」「初職内容」「結婚経験」「結婚年齢」「結婚後の生活経歴」について検討することで、地方の高学歴女性たちがどのようなライフコースを送り、いかにして社会と関わっていたのか、その輪郭を描き出していくことにしたい。なお、本データの「進路選択理由」と「結婚後の生活経歴」は、調査対象者が自由記述形式で記入しているため、これらを数値化して再現し、さらに自由記述部分と組み合わせることで、リアルなライフコース実態をとらえる。ただし、自由記述形式のデータを用いることにより、すべての調査対象者がすべての項目について記入している訳ではないというデータ特性をもつことを、あらかじめ留意点として述べておきたい。

基本的には、時代背景と和歌山女卒業後の進路選択の違いによる分析を行う。時代による変化は卒業年によって昭和4年～17年卒業生コーホート（昭和戦前・戦中前期卒業生）と昭和18年～22年卒業生コーホート（戦中後期・敗戦期卒業生）に分けて分析する。コーホートを昭和17年で区切った理由は、戦争の影響の多寡である。「学徒戦時動員体制確立要綱」「教育ニ関スル戦時非常措置方策」により、女学生たちが畑の開墾や工場労働等の学徒動員に本格的に巻き込まれていくのは昭和18年以降であるため、17年卒業生までは在学中における戦争の影響が比較的少なかったと考えられるからである。

卒業後の進路選択については、上級学校への進学・非進学および進学先による分析を行うことにする。

### 3. 和歌山高等女学校卒業直後の進路選択

一般に、「高等女学校卒業後は茶道・華道や裁縫などの習い事にしばらく通い、その後結婚をして専業主婦となる」というのが多くの高等女学校卒業生たちの過ごし方と考えられてきた。実際はどうだったのだろうか。

#### 3-1 卒業後の進路選択

最初に、和歌山女卒業直後の進路選択についてみていく。図1は卒業後の進路を示したものである。ここでは、「女子専門学校」「女子師範二部」「家政専攻科」「非進学」に分けて集計している。

家政専攻科とは、昭和3年に和歌山女に付設された、家政科目を主とする1

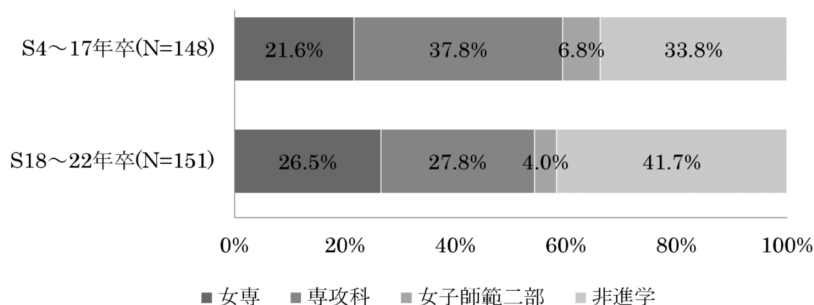


図1 卒業コーホート別 卒業後の進路選択

年制の付設課程であり、文部省に正規に認められた高等科(二年制)や中等教員免許が取得可能な専攻科(三年制)とは異なる。昭和17年からは、同窓会組織の桜映会が運営する「桜映学園」と称されるようになっていた。当時こうした家政科目を中心に修得する付設課程は和高女のみにもみられたものではなく、たとえば関西地方でいえば京都府立第一高等女学校の「鴨沂学園」や兵庫県立第一神戸高等女学校の「欽松学園」など、他の公立名門高等女学校にも付設されていた<sup>5</sup>。

図1をみると、この家政専攻科への進学者がS4～17年卒コーホートの37.8%、S18～22年卒コーホートの27.8%となっており、女子専門学校の21.6%、26.5%、女子師範二部の6.8%、4.0%と比して、卒業後の進学先として一番多くを占めていたことがわかる。

非進学者は、S4～17年卒コーホートで33.8%、S18～22年卒コーホートで41.7%と、戦中後期・敗戦期の卒業生のほうが非進学者の比率が高くなっている。ただし、「非進学」カテゴリーのなかには、臨時教員養成所や洋裁学校、英文タイプライターの学校など正規の学校とはいえないが、単なる花嫁修業の習い事ではなく特定の職業技術や資格取得を目的とした各種学校や養成所に進んだ者がそれぞれ、4.1%と9.9%含まれていた。

以上のことから、どちらのコーホートにおいても、何らかの学校に進んだ者が約7割、どこの学校にも進まなかった者が約3割だったことが明らかになった。

### 3-2 進学・非進学理由 —自由記述の分析から

アンケートでは進学者に対して進学理由・非進学理由を自由記述で尋ねている。

「もう少し学校生活を楽しみたかったから」「まだ働きたくなかったから」などの回答は「学校生活の延長」としてまとめた。「上の学校に進学するのは当たり前という家だった」「姉も専攻科だったので当然のように私も進んだ」といった回答は「当然という家庭環境だったから」に、「花嫁修業になるから」「家庭的なことをまとめて教えてもらえたから」等は「家庭的なことを身につけるため」に、「医者になりたかったから」「教師になりたかったから」「もしもの時のために資格を取っておきたかったから」「女性でも自立するには資格が必要だったから」等は「自立のため 資格取得のため」にまとめた。あとは、「家から通えたから」「親にすすめられたから」「その他」とした。これらをコーホート別に集計したのが表1である。

表1 卒業時期コーホート別 進学先別 進学理由

	S4～17年卒コーホート			S18～22年卒コーホート		
	女専	専攻科	師範二部	女専	専攻科	師範二部
学校生活の延長	4.0%	23.5%	0.0%	0.0%	23.1%	0.0%
当然 家庭環境から	16.0%	11.8%	0.0%	9.7%	0.0%	0.0%
勉強したい	20.0%	5.9%	0.0%	45.2%	26.9%	0.0%
自立のため 資格取得のため	36.0%	2.9%	66.7%	25.8%	0.0%	66.7%
家庭的なことを身につけるため	4.0%	14.7%	0.0%	0.0%	3.8%	0.0%
自宅通学できたから	0.0%	17.6%	11.1%	0.0%	19.2%	16.7%
親のすすめ	20.0%	11.8%	22.2%	12.9%	11.5%	16.7%
その他	0.0%	11.8%	0.0%	6.5%	15.4%	0.0%
実数	25	34	9	31	26	6
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

$P < .000$

$P < .000$

当然のことながら、教職に就くための女子師範二部は「自立のため 資格取得のため」という理由がどちらのコーホートでも66.7%と最も多い。表からはうかがえないが、女子専門学校の中에서도、医学専門学校や薬学専門学校などは「自立のため 資格取得のため」と目的が明確であるが、それ以外の教養系の女子専門学校は英語や国文学などの「専門的な勉強がしたい」という理由と、「進学を当然視する家庭環境」という理由に分かれていた。

このなかで消極的な進学理由が目立つのは家政専攻科であろう。「学校生活の延長」がS4～17年卒コーホートで23.5%と最も多く、次が「自宅通学できたから」の17.6%である。S18～22年卒コーホートでもこれらの理由を述べるものはそれぞれ23.1%、19.2%となっており、進学理由の2位、3位を占めている。また、家政専攻科の「その他」には、「お稽古事と両立できるから」「女子専門学校への進学を希望していたが、親に反対されたため専攻科に進学した」「女子専門学校の試験に落ちたため、しかたなく」「病弱だったから」「進学希望だったが女が学問をすると結婚(入り婿)に差し障ると反対されたから」といった「しかたなく進学」したものも含まれていた。県外に出なければ女子専門学校に通うことができない和歌山の女学生たちが、学校生活の延長と花嫁修業の習い事を両立させるのに最も適当な進学先が、修業年限1年の家政専攻科だったのだろう。

ただし、S18～22年卒コーホートの家政専攻科進学者の進学理由のトップは「もっと勉強したかった」になっている。「戦争中全く勉強できなかったので」「戦争で学力が身につかなかったの」といった回答が多く見られたことから、卒業生たちにとって家政専攻科がとりわけ敗戦期における貴重な進学先となっていたことがうかがえる。

表2 非進学理由

	S4～17年卒	18～22年卒
家庭の事情	27.0%	32.1%
当時の風潮	29.7%	14.3%
戦災 戦争	5.4%	32.1%
親の反対	13.5%	3.6%
地元を出られない	5.4%	5.4%
就職のため	18.9%	12.5%
計	100.0%	100.0%
実数	37	56

$p < .017$

では、進学を選択しなかった理由は何だったのか。「家庭の事情」「当時の風潮」「戦災 戦争」「親の反対」「地元を出られない」「就職のため」に分類し、コーホート別にまとめたのが表2である。

S4～17年卒コーホート、S18～22年卒コーホートともに非進学理由の3割

程度を占めているのが、「家庭の事情」である。「経済的な理由」「男兄弟が多かったので女の自分は進学したいと言えなかった」「家が忙しかったため」「父が倒れたため」等がここに入る。

S4～17年卒コーホートで非進学理由として最も多いのは「当時の風潮」(29.7%)である。「婚期が遅れるから」「女学校だけで十分という風潮だったから」「花嫁修業はそれぞれ専門の先生につくよう親に言われたから」「女の子は進学しないものだと思っていたから」等がここに入っている。また、「親の反対」もS4～17年卒コーホートのほうがS18～22年卒コーホートよりも10ポイント程度多い。

S18～22年卒コーホートの特徴は「戦災 戦争」(32.1%)である。「戦争で進学どころではなかった」「戦災にあったから」「父が戦死したから」「空襲が激しくなり疎開したから」「終戦の年で進学したいと言う勇気がなかった」等、戦争による直接的な被害が多く述べられている。またこのコーホートでは、「就職のため」のなかに「徴用のため」、「学徒動員で挺身隊として軍需工場で働いていたから」「5年生になる前に繰り上げ卒業になり学徒動員で就職したから」など、ここでも戦争に関する記述が目立つのも特徴といえる。

#### 4. 和歌山高等女学校卒業生のライフコース選択

それでは、学校卒業後のライフコースについて、学校卒業後の就業経験と結婚経験、結婚後の生活パターンに分けて検討する。

##### 4-1 学校卒業後の就業経験と結婚経験

表3は、和高女卒業後の進路別就業経験率を卒業時期コーホート別に集計した三重クロス集計の結果である。就業経験には、会社勤めや教職に就く以外に、家業従事や洋裁の仕事等も含めている。つまり、戦前女性の婚姻前の典型的な生活と考えられてきた、「仕事をせず家事や稽古事をして過ごす」という生活以外を選択した者の比率をこの表は示している。

表からは、分析対象者全体の約半数が和高女卒業後に就業していたことがわかる。コーホート別にみると、S18～22年卒コーホートのほうがS4～17年卒コーホートよりも13ポイント以上就業経験率が高い。これを卒業後の進路別にみると、就業経験率が最も低いのはS4～17年卒コーホートの家政専攻



科進学者で、27.3%の就業率である。

就業内容について記載のあった98名を集計すると、最も多いのが教員の38名(38.8%)、次が銀行・会社員の25名(25.5%)、続いて軍需工場の16名(16.3%)であり、医師・薬剤師は10名(10.2%)だった。

表3 卒業時期コーホート別 卒業後の進路別就業経験

				女専	専攻科	師範二部	非進学	合計
S4～17卒 コーホート	卒業後の 職業経験	なし	度数	18	40	0	25	83
			%	58.1%	72.7%	0.0%	52.1%	57.6%
		あり	度数	13	15	10	23	61
			%	41.9%	27.3%	100.0%	47.9%	42.4%
		合計	度数	31	55	10	48	144
			%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
S18～22卒 コーホート	卒業後の 職業経験	なし	度数	15	23	0	26	64
			%	40.5%	57.5%	0.0%	42.6%	44.4%
		あり	度数	22	17	6	35	80
			%	59.5%	42.5%	100.0%	57.4%	55.6%
		合計	度数	37	40	6	61	144
			%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
合計	卒業後の 職業経験	なし	度数	33	63	0	51	147
			%	48.5%	66.3%	0.0%	46.8%	51.0%
		あり	度数	35	32	16	58	141
			%	51.5%	33.7%	100.0%	53.2%	49.0%
		合計	度数	68	95	16	109	288
			%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

P < .000

なお、結婚経験率については、卒業時期コーホートによっても卒業後の進路によっても統計的に有意な差は見られなかった。S4～17年卒コーホートの平均結婚年齢は22.8歳、S18～22年卒コーホートの平均結婚年齢は23.4歳で、全体として93.0%の結婚経験率だった。

## 4-2 結婚後の生活形態

次に和女卒業生のライフコースパターンについて、結婚経験のあるもの(266名)に限定してみていくことにする。結婚後の生活形態は、結婚あるいは出産を機にその後仕事に就かなかった人を「専業主婦型」、結婚・出産後に再び就業した人を「中断後仕事再開型」、結婚・出産後も仕事を継続した人を

「職業継続型」の3パターンに分類して検討する。

### 1) 結婚・出産による就業離脱 ー就業継続の難しさ

表4が、卒業時期コーホート別に和高女卒業後の進路と結婚後の生活形態についてクロス集計(三重クロス集計)を行った結果を示したものである。分析対象者全体では学校卒業後の進路選択とライフコースパターンの間に有意な関係が見られた( $p < .000$ )。しかし、卒業時期別にみた場合、進路選択とライフコースパターンに有意な関連がみられたのは、S18～22年卒コーホートのみであった。では、2つのコーホートでどのような特徴と違いがみられるのだろうか。

表4 卒業時期コーホート別 卒業後の進路別 結婚後の生活形態

			女専	専攻科	師範二部	非進学	合計
S4～17 卒 コーホート	専業主婦	度数	15	37	3	20	75
		%	51.7%	69.8%	37.5%	47.6%	56.8%
	中断後仕事 再開	度数	11	16	4	19	50
		%	37.9%	30.2%	50.0%	45.2%	37.9%
	職業継続	度数	3	0	1	3	7
		%	10.3%	0.0%	12.5%	7.1%	5.3%
	合計	度数	29	53	8	42	132
		%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	専業主婦	度数	17	21	0	18	56
		%	51.5%	55.3%	0.0%	31.6%	41.8%
S18～22 卒 コーホート	中断後仕事 再開	度数	11	17	1	35	64
		%	33.3%	44.7%	16.7%	61.4%	47.8%
	職業継続	度数	5	0	5	4	14
		%	15.2%	0.0%	83.3%	7.0%	10.4%
	合計	度数	33	38	6	57	134
		%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
合計	専業主婦	度数	32	58	3	38	131
		%	51.6%	63.7%	21.4%	38.4%	49.2%
	中断後仕事 再開	度数	22	33	5	54	114
		%	35.5%	36.3%	35.7%	54.5%	42.9%
	職業継続	度数	8	0	6	7	21
		%	12.9%	0.0%	42.9%	7.1%	7.9%
	合計	度数	62	91	14	99	266
		%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

S4～17年卒コーホートの特徴といえば、なんといっても職業継続の難し

さであろう。結婚・出産後も中断なく職業を継続できた者は132名中わずか7名(5.2%)しかおらず、女子師範二部に進学した者(8名)でさえ、職業を継続したのはたった1名だったのである。それ以外で職業が判明しているのは、女子医学専門学校に進学した2名と、泉南の佐野高等女学校の専攻科で小学校の教員免許を取得した卒業生1名である。女子医学専門学校に進学した2名の卒業生は、結婚前は病院勤務であったが、2名とも出産後に自宅開業医となっている。おそらくこのような働き方の工夫をしなければ、仕事と子育ての両立が不可能だったのではないかと考えられる<sup>6</sup>。これほど職業継続が困難な時代においては、学校卒業後は専業主婦になるというのが和高女卒業生の主流であったようだ。

ところがS18～22年卒コーホートでは「専業主婦型」が56.8%から15ポイント減少し41.8%となっており、かわりに就業者が増加している。「職業継続型」は134名中14名(10.4%)と、少数であることにはかわりはないが、それでもおよそS4～17年卒コーホートの2倍の比率に増えている。そのうち8名が教員であり、医師・薬剤師が1名ずつだった。また、「中断後仕事再開型」も37.9%から47.8%と10ポイント程度増加し、結婚後の生活形態のなかで、最も多くを占めるようになっていたのである。

結局のところ、結婚前の就業経験とあわせて考えた場合、和高女卒業後に一度も就業経験なく結婚後もずっと専業主婦として生活した人は、288名中82名であり、分析対象者の28.6%を占めるに過ぎなかった。これを和高女卒業後の進路別にみると、女子専門学校進学者の30.8%、家政専攻科進学者の42.1%、女子師範二部の0.0%、非進学者の19.6%にあたる。どちらのコーホートにおいても最も「専業主婦型」が多いのは家政専攻科進学者だった。

## 2) 子育て後の就業 ―女性たちの多様な働き方

では、結婚・子育てで就業を中断した和高女卒業生たちは、その後どのような働き方をしていたのだろうか。ここでは「中断後仕事再開型」の卒業生のうち、仕事内容が記入されていた114名を取り出してみていくことにする。

図2が、中断後の就業形態の内訳を卒業時期コーホート別に示したものである。「フルタイム勤務」がS4～17年卒コーホートで34.0%(17名)、S18～22

年卒コーホートでは17.2%(11名)である。これらのうち、前者のなかの5名、後者のなかの2名は、夫を戦争や病気で亡くした人、あるいは離婚をした人である。何らかの理由で就業を余儀なくされた人が、結婚・子育て後のフルタイム勤務者に含まれている。

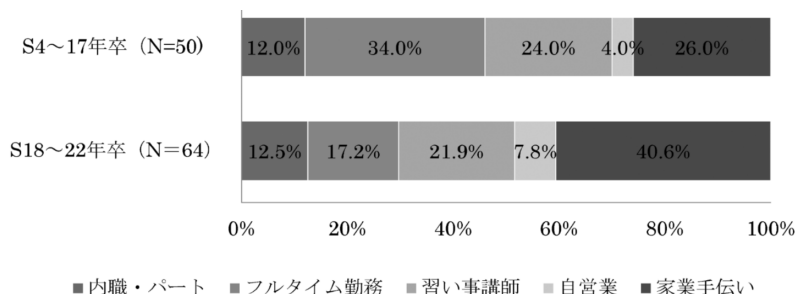


図2 結婚・育児による中断後の就業形態

「中断後仕事再開型」における「フルタイム勤務」の仕事内容と和高女卒業後の進路に関わりがあるのは、教員として再就職した女子専門学校卒業生(3名)である。それ以外としては、親の反対で奈良女子高等師範学校保母科への進学をいったん諦めたものの、子育て一段落後の35歳に保母資格を取り保育園に就職し、最終的には定年退職年齢まで保育園長を勤めあげた女性の例や、30歳からかねてよりの夢であった教職に就いた女性の例もみられた。結婚・出産後にフルタイムの仕事をする場合も、教職に就く卒業生が一定割合存在したことがわかる。

では、「フルタイム勤務」以外の、比較的時間的に融通のきく仕事に就いている人たちはどうか。「内職・パート労働」はどちらのコーホートもおおよそ1割程度の人が経験していたが、S4～17年卒コーホートの6名中4名、S18～22年卒コーホートの8名中7名が洋裁の仕事に就いていた。

興味深いのは、和高女卒業生には、文化的・芸術的趣味や専門的知識・技能に関する「習い事講師」職がどちらのコーホートでも2割以上を占めている点である。具体的にあげていくと、華道講師、茶道講師、日舞講師、書道講師など旧来からの女性の嗜みに関する講師職の他、家庭教師、英語塾講師、

ピアノ教室教師、アートフラワー講師、レザークラフト講師、鎌倉彫講師、芸術人形制作講師、洋裁講師、手芸講師(染物、編み物 等)など、これまで女子専門学校や結婚前後の習い事を通して身に付けてきた専門知識やハイカルチャーな文化的・芸術的趣味の講師として働いていた。これが地域の名門女学校卒業生の特徴のひとつではないかということが考えられる。ただし、本稿ではこれ以上の分析はできないため、今後の研究課題としてここでは仮説の提示にとどめておきたい。

## 5. おわりに

本稿では、和高女卒業生(昭和4年～昭和22年卒業)を対象に、地方の高学歴女性のライフコース選択について検討してきた。明らかになったのは次の点である。

第一に、分析対象時期の和高女卒業生のおよそ7割が何らかの学校に進学し、残り3割が非進学を選択していたことを指摘した。ただし、その進学理由も非進学理由も家庭の事情や家庭の教育方針が深くかかわっていた。特に戦時中に学校生活を送っていたS18～22年卒コーホートは、進路選択において何よりも戦争被害の影響を強く受けていた。

第二に、「女学校卒業後に職に就かずには花嫁修業をし結婚し、専業主婦としてずっと過ごす」という、人生のなかで一度も仕事に就かないライフコースを選択していたのは、分析対象者の3割にも満たなかったことを指摘した。このうち最もこのライフコースに沿った生活を送っていたのは、和高女に附設されていた1年制の家政専攻科進学者だった。和高女卒業後にすぐに職に就く必要性に迫られない家庭環境にあって、さらに県外に出ることなく家政科目を幅広く習得できるこの課程は、専業主婦志向の親にとっても娘にとっても、うってつけの進学先だったのであろう。

こうした傾向については、丹波篠山の篠山高等女学校の事例研究(吉田1991)と共通性がみられる。篠山高等女学校でも進学者の大多数が補習科とよばれる1年制の付設課程に進んでいたこと、その進学目的については学校生活の延長であったことが指摘されている。このような付設課程への進学行動については、今後さらに事例研究を進めることで知見の一般化をはかる必要

がある。

そして第三が、職業継続の難しさと「教える」仕事に就く人の多さである。結婚前に何らかの仕事に就いていた人は分析対象者のおよそ半数に及んでいたが、職業継続できたものは1割にも満たなかった。ほとんどの人は結婚・出産後に、一時的な場合も含め専業主婦になったのである。それは教職に就いた人でも同じだった。

結婚前の職業で最も比率が高かったのは教職であったが、結婚後もずっと働き続けられる人はほんのわずかだった。しかしながら、それでも結婚後に新たに教職に就くものも一定数存在していた。実際、戦前期の高等教育を受けた女性のなかに「教える」職に就くものが非常に多かったことは先行研究（民主教育協会1961）でも指摘されている。こうしたこれまでの知見に加えて今回新たに指摘したのは、高等教育を受けなかった女性も含めて、「中断後仕事再開型」の2割以上がさまざまな種類の「習い事講師」として働いていたことである。これはどうしてなのだろうか。

理由として考えられるのが、和高女への進学者には地域の富裕層や子どもの教育に熱心な新中間層出身者が他の高等女学校に比べて多かったことである。また旧中間層出身者にも茶華道をはじめ、和裁・洋裁など女性の嗜みや技能に関する習い事に熱心な家庭が多かった（土田2014）。さらには、おそらく結婚後にも文化的趣味の活動が許される環境にあったものも多かったのであろう。こうした恵まれた家庭環境や嫁ぎ先の生活環境のなかで身につけた文化資本をうまく生かす形で、結婚後の仕事としていた実態が明らかになったのである。

ここで指摘しておきたいのが、こうした仕事は家庭生活との両立が可能である点である。すべての回答者が年齢を記入しているわけではないが、そのほとんどが30代から40代に結婚後の仕事を開始している<sup>7</sup>。主たる稼ぎ手ではない立場で、子育て一段落後に自分自身で時間の工夫と都合をつけながら「教える」仕事をするというライフスタイルを送るものが、和高女卒業生のなかには無視できないほどの割合で存在していたのである。

最後に、女性たちの様々な社会参加の実態について少し触れておきたい。紙幅の関係で今回は分析を行わなかったが、結婚後は職業につかず専業主婦

として生活してきた人も、ずっと家庭内だけで過ごしていたわけではなかった。PTA役員や地域の婦人会役員、消費者団体役員、ボランティア活動など、「専業主婦型」女性の約2割の人が様々な社会活動に参加していた。また、就業しながらこうした活動を並行して行っている人、あるいは定年退職後に社会活動に参加する人もいた。このように、賃金労働とは無関係な、しかし社会的に意味のある女性たちの活動実態については、今後さらにスポットを当てていく必要があるだろう。

さて、本稿が事例対象としたのは、和高女卒業生のみである。今後の課題としては、他の高等女学校との比較検討を行うことの他、今回の分析結果が中等教育卒業者全体のなかにどう位置づくのか、例えば、SSM調査'(社会階層と社会移動全国調査)の2次分析を行うことなどで検証していきたいと考えている。

#### 注

- 1 先行研究でも卒業後の生活について全く触れられていないわけではないが、結婚経験の有無や子ども数、就業経験の有無についての単純集計が行われているくらいである。
- 2 ただし、日本女子大学の研究は大正期の卒業生を対象としたものである。
- 3 ただし、戦時中の昭和18年に文教高等女学校が現在の明和中学校の位置に新設されている。
- 4 分析対象者の卒業年は昭和4年から昭和22年となっているが、昭和初期卒業生のサンプル数は非常に少ない。また当然のことながら追加調査の対象年卒業生のサンプル数は多くなっている。
- 5 京都府立第一高等女学校には高等科と正規の専攻科、第一神戸高等女学校と大阪の大手前高等女学校には高等科が設置されていた。和高女にはこのような正規の進学先は設置されていなかった。
- 6 女子専門学校卒業生で医者や薬剤師になった女性のほとんどが開業医や薬局(自営)の薬剤師として働いていたことが指摘されている(民主教育協会1961)。

卒業年度別 分析対象者数

卒業年	人数	%
4	1	0.3
5	3	1.0
6	1	0.3
7	1	0.3
8	1	0.3
9	5	1.6
10	8	2.6
11	2	0.7
12	10	3.3
13	11	3.6
14	43	14.1
15	9	3.0
16	12	3.9
17	42	13.8
18	32	10.5
19	12	3.9
20	35	11.5
21	69	22.7
22	7	2.3
合計	304	100.0

- 7 「中断後仕事再開型」(114名)のうち仕事再開年齢が記入されていた者(60名)の83.3%が、30～40代で再び仕事を始めていた。

#### <参考文献>

- 青井和夫 編著 1988 『高学歴女性のライフコースー津田塾大学出身者の世代間比較』勁草書房
- 稲垣恭子 2004 「関西地域における高等女学校の校風と女学生文化に関する教育社会学的研究」平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書
- 小山静子 1991 『良妻賢母という規範』勁草書房
- 民主教育協会 1961 『女子の高等教育と職業および課程の問題』(現代日本女子教育文集10 2004年、日本図書センター)
- 日本女子大学女子教育研究所編 1975 『大正の女子教育』 国土社
- お茶の水女子大学企画広報室・奈良女子大学総務課大学改革推進室 2001 「卒業生・修生のライフコースと国立女子大学の将来像に関する調査結果報告書」
- 落合恵美子 1989 『近代家族とフェミニズム』勁草書房
- 桜映会東京支部 1990 「和歌山県立和歌山高等女学校の歩みー創立から学制改革まで」
- 土田陽子 2004 「地方都市における戦前期の新聞メディアと学校イメージー高等女学校の威信・階層・学校文化ー」『教育社会学研究』第74集、pp.149-167
- 土田陽子 2010 「近代地方都市の公立名門高等女学校における生徒文化の特徴と構造ー学校文化と生徒文化の關係に着目して」京都大学グローバルCOEプログラム「GCOE Working Papers 次世代研究74」、pp.1-18
- 土田陽子 2011 「近代和歌山市における公立名門高等女学校の利用層ー文教地区成立過程に注目して」『神戸女子大学教育諸学研究』第25巻、pp.53-65
- 土田陽子 2012 「公立名門高等女学校の同窓会誌にみる『あるべき女性像』ー県立和歌山高等女学校と府立京都第一高等女学校の比較分析から」京都大学グローバルCOEプログラム「GCOE Working Papers 次世代研究74」、pp.1-18
- 土田陽子 2014 『公立高等女学校にみるジェンダー秩序と階層構造ー学校・生徒・メディアのダイナミズム』ミネルヴァ書房
- 山本禮子・福田須美子 1987 「高等女学校の研究(第二報)：高女卒業生のアンケート調査から」『和洋女子大学紀要・文系編』27、pp.107-134
- 吉田文 1991 「高女教育の社会的機能」『学歴主義の社会史ー丹波篠山にみる近代教育と生活世界』有信堂、pp.118-135